

## アフリカの人々と多様性に魅了されて

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

連携協力部 看護師 皆河 由衣

アフリカと聞いて、どのようなイメージや場所が思い浮かぶでしょうか？

広大なサバンナ、カラフルなアフリカ布、リズムカルな音楽そして多様な文化を持つ人々など、その想像だけで心が躍るかもしれません。

私はこれまでに、ベナン共和国やコンゴ民主共和国でのボランティアや仕事に携わる機会に恵まれました。今回は、主にコンゴ民での活動、現地の人々との交流や日常生活を通じて見えたことや感じたことについて、少しだけお話ししたいと思います。

### 限られた資源の中で生き抜く知恵と絆

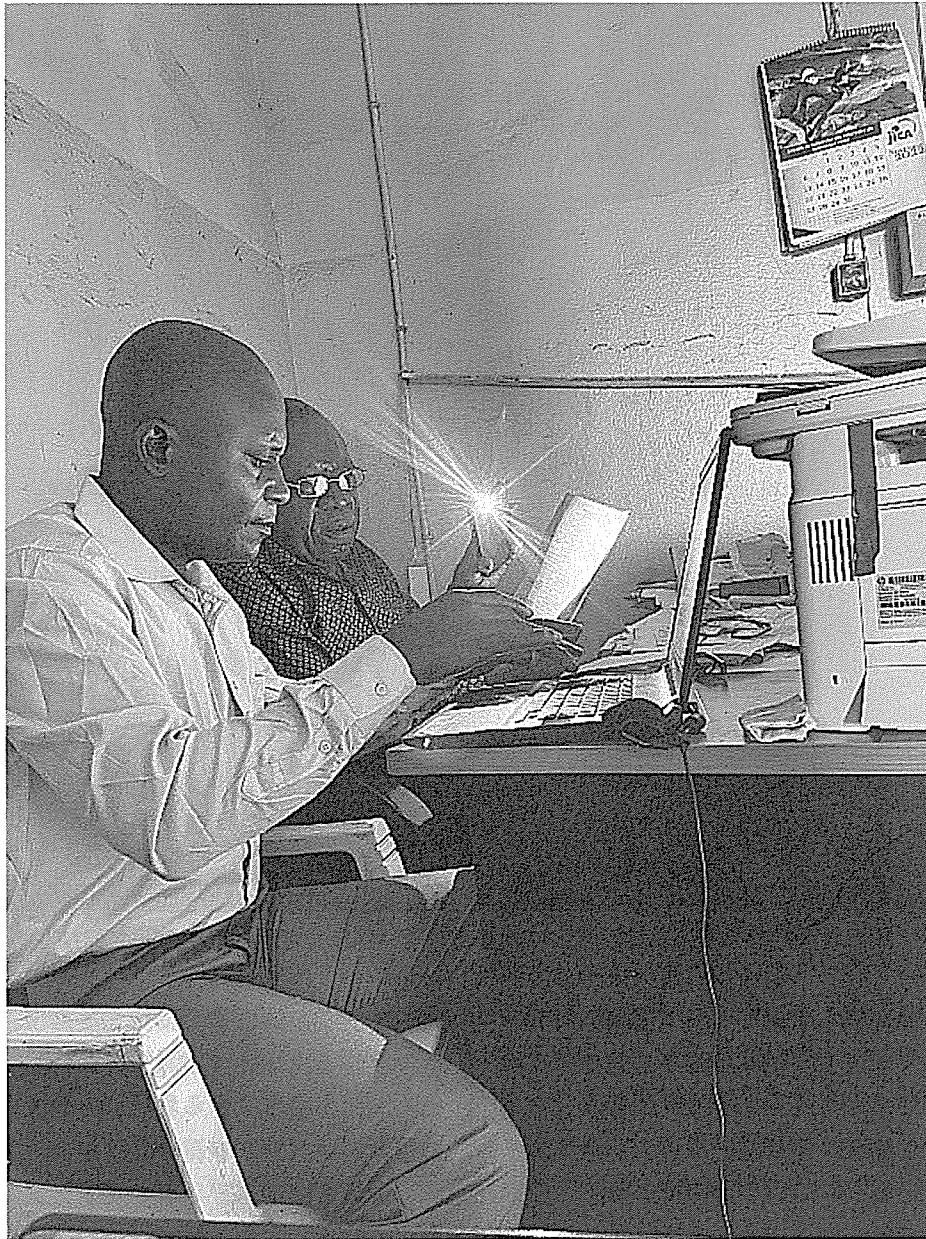
アフリカの多くの国々では、水や電気の共有が不十分な地域が存在します。コンゴ民も電気の普及率はわずか20%程度で、頻繁に停電や断水が発生します。私が住んでいた地方都市では、1週間続く停電もあり、冷蔵庫の食材が腐ることも日常茶飯事でした。首都で買った贅沢品（地方では買えない！）が腐ると悲しい気持ちになるので、必要最低限のものだけを購入し、停電時は氷を購入してクーラーボックスで保存するなどに対応したこともありました。また、私の住んでいた家は1日2時間だけ水が使えるという制約があったため、家事やシャワーをその時間に合わせて調整する必要がありました。最初は水がでないことに落胆しましたが、「1日2時間だけど、この時間は水が出る！」という事実が安心材料となり、限られた資源を最大限に活用し、適応することが生活の一部となりました。時には、電気が来ないことを潔く諦めることも大切で、そんな時は同僚や近所の方と会話を楽しんだり、歌を歌ったり

して過ごしました。こうした日常を共に乗り越える過程で生まれる人々との絆は、現地での生活や活動を進める上で非常に重要なものでした。

水や電気に限らず、現地の人々はどんな状況にも適応する力を持っています。コンゴ民の同僚から学んだ「あるものの中で、ないものを作りあげる」発想は非常に印象的であり、現地の人々の創意工夫に感心させられる毎日でした。

### ゴムのように伸びる時間

日本では電車のダイヤが乱れることは少なく、会議に遅刻する人も少ないのではないかと思います。しかし、アフリカでは会議やワークショップが時間通りに始まることは稀で、予定通りに終わることも少ないです。例えば、待ち合わせの時間を決めていたにも関わらず、3時間遅れて到着したり、16時までと予定していたワークショップや研修でも、「今日は疲れたから帰りましょう！また明日！」ということがよく起こります。これには、時間を柔軟に捉える文化的な違いも影響しているようです。そのため、現地の人々の考え方や時間の使い方に配慮しつつ、先読みしたり時間を有効に使って進めることは活動を進めるうえでは欠かせませんでした。「時間は伸びるゴムのようなものだから」というベナンの同僚の言葉を思い出し、開始時間を早めに設定したり、待ち時間を活用して他の作業を進めるなどして調整しながら、心穏やかに過ごすよう心掛けました。こうした工夫や心構えは自然と身についていったように思います。



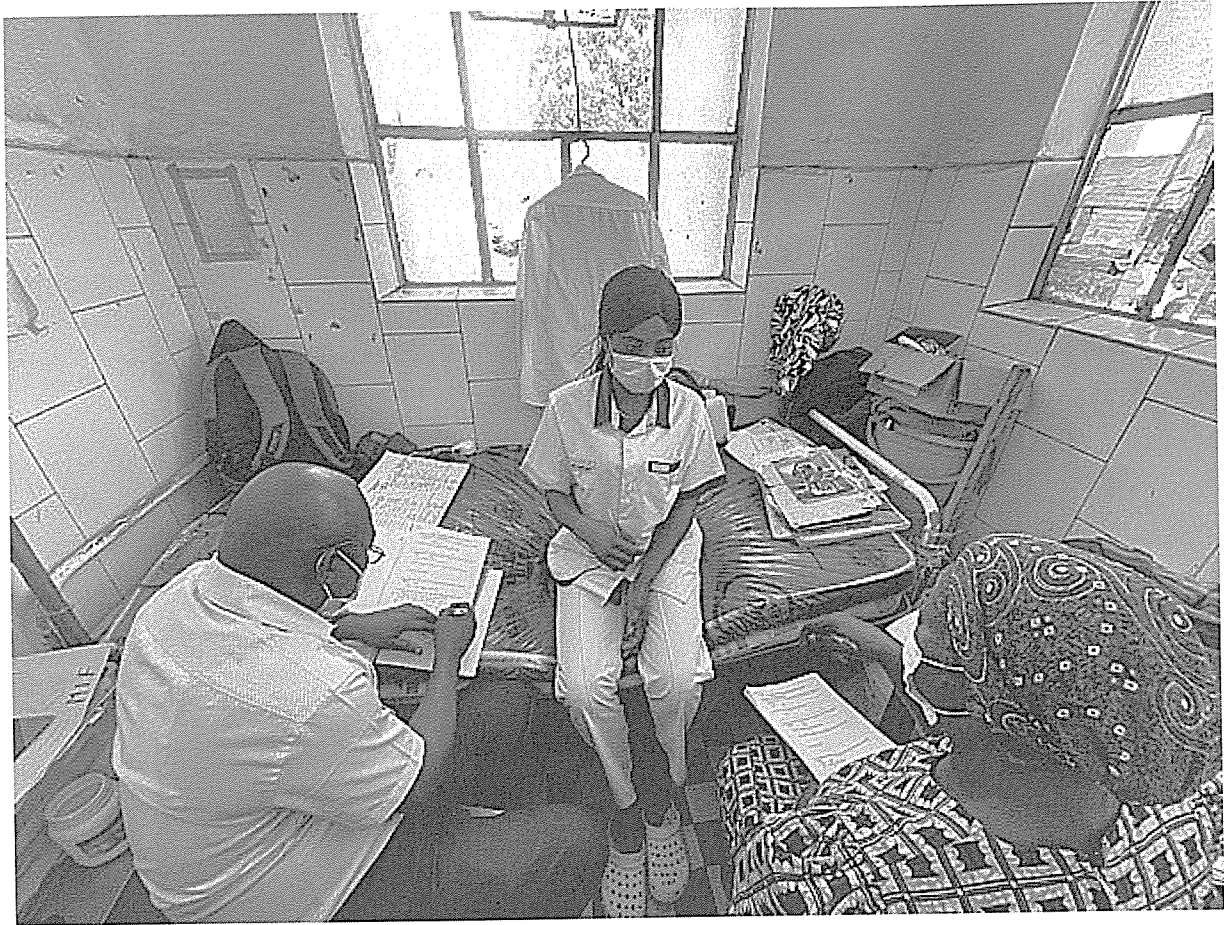
停電の中、携帯のライトで資料作成を続ける州の看護行政官たち

### 合意形成への長い道のり

アフリカの多くの地域では、議論のプロセスが非常に重視され、意見交換や合意形成に時間がかかることが多くあります。個々の意見を尊重しつつ、集団全体で意思決定することが大切にされています。例えば、コンゴ民の会議では、会議計画書を参加者全員で読み上げ、内容を確認し、必要であれば修正し、それを合意する時間が設けられます。このプロセスには時間がかかりますが、現地の人々にとっては非常に重要な作業として位置づけられています。会議や研修に参加していると、時には「その議論は必要なのか？ さっきも同じ話をしていなかったっ

け？」と思うことがありますが、後から振り返ると、時間を費やした丁寧な議論を通じて、合意形成や課題の理解が深まっていることに気づかされます。また、このプロセスを通して、参加者全体の結束が強まり、問題意識に対する絆を深まるという副次的な効果も感じることができました。

合意形成に欠かせないもう一つの要素は、「食事の時間」です。ある日、半日の活動を食事なしで実施しようと提案した際、同僚の看護行政官から「食事が無いとは何事だ！」と強い反感を受けたことがありました。食事の時間は非常に大切にされており、会議や研修運営には欠かせないものでした。コ



州の看護行政官らによる聞き取り調査の様子（臨床実習指導者への聞き取り）

ンゴ民では、会議が始まるとすぐに「さあ、脳に栄養を与える時間です！まず朝食を食べて、プロダクティブな会議にしましょう」という光景を目にします。最初は「今、始まったばかりなのにもうご飯なの？」と驚きましたが、これが通例であることを学びました。

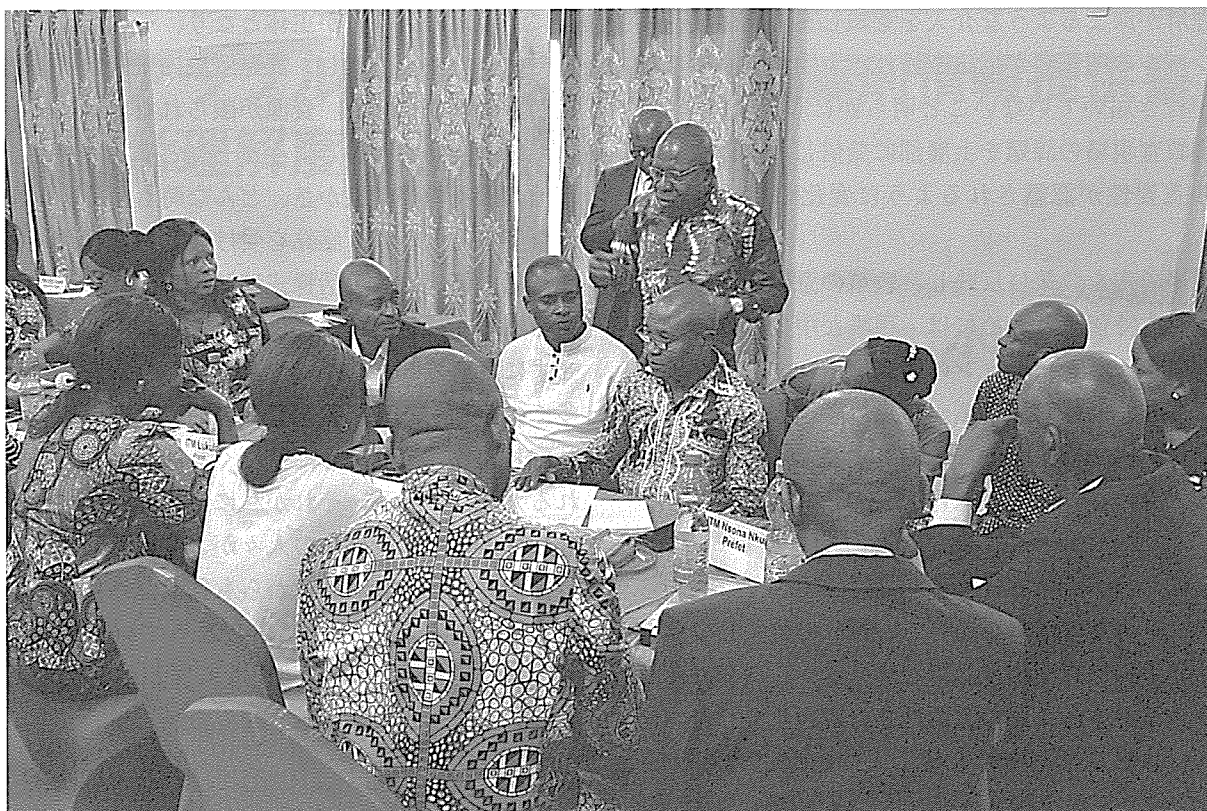
日本人的な感覚からすると効率的でないと疑問に感じることもしばしばあります。しかし、丁寧な議論と意見交換を通じて、参加者全員が納得し、積極的に協力する意欲を持つことが、持続可能な解決策を見つけるために重要であるということを経験を通して理解できるようになりました。同時にそれはアフリカの多様な文化や社会背景に根ざしているものであることを実感しました。文化的社会的背景を理解し、現地の人々と共に歩みながら、現地に根ざした活動を進めていくことの重要性を強く感じました。また、非常に長い協議を終えて、皆さんと大切なことを合意できた時の達成感は格別なものでした。

#### オーナーシップが育む団結力

コンゴ民では、地域住民のニーズに応じた保健サービスを提供できる看護職を育成するため、保健省は新看護教育プログラム（コンピテンシーに基づく看護教育プログラム）の導入を決定しました。このプログラムは2005年に導入が開始されましたが、広大な国土と未整備な制度や政策のため、全国的な普及はなかなか進んでいませんでした。

私が配属された州では、州内にある48校の中級保健人材養成校のうち、新看護教育プログラムを導入しているのはたった1校だけでした。そこで、JICAの技術協力プロジェクトを通じて、新たに11校に新看護教育プログラム導入を支援しました。しかし、臨床実習中に学生たちが十分な指導を受けられない状況が見受けられました。そのため、州の看護行政官が中心となり、看護教員や実習指導者への聞き取り調査を行いました。

その結果、臨床実習を行う医療機関が教育プログラムの変更を知らずに学生を指導していることや実習評価方法が浸透していないこと、養成校と実習先



経験共有セミナーにて  
中央保健省、州保健医務局、保健ゾーン関係者らが協議している様子

の協力体制が弱いこと、などの課題が明らかになりました。これらの課題を解決するために、評価方法の標準化、関係者への啓発活動、臨床実習指導者の能力強化、養成校のモニタリングなどが計画・実施されました。これらの活動を通じて、現地の関係者間に看護教育の普及に対する共通認識が生まれ、課題を「自分事」として捉える意識が広まりました。その結果、48校中42校で新看護教育プログラムが導入され、2024年には州内全校での導入が予定されています。州の看護行政官たちは、自分たちで実施した現状調査とその結果に基づく介入により、教育現場で少しずつ良い変化が見られ始めていることに自信を深め、この自信が彼らの活動を進める大きなモチベーションに繋がっていきました。様々な活動を通じて、看護教育に関わる州内の関係者らが対話を重ねる中で、州全体が主体的に課題に取り組む姿勢が強まりました。現場で団結力が強まっていくことを肌で感じ、非常に嬉しい気持ちになったことを今でも覚えています。このように、現地の方々のオーナーシップの醸成が、州レベルでの取り組みを進める大きな促進要因となりました。

#### 現場と中央を近づけること

低所得国では、政策がトップダウンで進められることが多いように思います。コンゴ民でも、保健省が定めた政策に基づき、州や保健ゾーン\*レベルで看護教育の普及活動が進められています（\*コンゴ民における保健・衛生活動の基礎単位）。トップダウンの方針があるからこそ、政策が浸透する部分もあるように思いますが、広大な国土と限られた資源、そして様々な関係者が関与していることから、中央省庁と現場の間にはギャップが生じることがしばしばあります。例えば、看護教育の普及においては、中央で定められた政策が現場でそのまま運用されることが求められますが、現場の実情に合わず、結果としてうまく機能しない事例が多く見受けられました。このような状況を改善するためには、州保健医務局の行政官による中央への積極的な働きかけが重要になりますが、現地のパワーバランスの問題もあり、そのような機会は限られていました。

そのため、中央（保健省）、州（州保健医務局）、保健ゾーン（養成校や実習受け入れ施設）の関係者が一緒に協議する機会をできるだけ多く設け、双方

の理解が深まるような介入を意識しました。すべてのレベルの関係者が協議を繰り返す中で、必要な情報が行き届いていないこと明らかになると同時に、看護教育現場の課題を上層部に発信し、共有することの重要性が認識されるように変化していきました。

現場の声を政策に反映し、政策の意図を現場にわかりやすく伝えるためには、現場と中央の間で効果的なコミュニケーションの機会を増やすことが不可欠であり、関係者が日頃から意思疎通しやすい雰囲気や仕組みを構築することが重要であることを学びました。

#### 最後に

アフリカでの活動を通じて、自分の物差しではなく、相手の視点や物差しで物事を考え、あらゆる視点から検討することの重要性を再認識しました。同

時に、現地の人びとが主体となり、その現場で根付きやすい方法を模索し、課題解決に取り組むことの大切さを学びました。資源が限られた非常に厳しい環境でも現場を改善しようと一丸となって取り組む現地の人々の姿や温かさ、どんな時も諦めない前向きな姿勢に救われ、感銘を受けました。現地の多様な文化、価値観、生活様式に触れ、人々の繋がりを強く感じ、毎日を精一杯生きることの大切さを実感せずにはいられませんでした。関われば関わるほど多くの発見があり、言葉では説明できないほど魅かれてしまう、何度でも帰りたくなってしまふ魅力溢れる大好きな場所、それが私にとってのアフリカかもしれません。世界中の人々がより健康に生きられる世の中を目指し、これからも保健医療に関する活動に関わり続けていけたらと思っています。そして、またいつの日かアフリカに関わる機会があれば、さらなる魅力を発見してみたいと思います。

